

〔日本の陶磁 — 縄文から江戸まで — 展によせて〕

やきものと詩・書の融合

一尾形乾山作鏤絵柳文重香合をめぐって一

詩・書・画に優れることは、特に宋時代以降、文人の最大の理想とされ、中国・日本を問わず、文人画にはしばしば詩が書かれ、詩・書・画の趣が一体となり、清新なる世界を表現することが目指されてきました。絵画と詩・書との融合は、中国を核としながら東アジアで古くから展開してきましたが、やきものにおいて、絵付けと詩・書を融合させ、新たな境地を開いたのは、江戸時代の前期に京都で活躍した尾形乾山(1663~1743)といつてよいでしょう。

乾山は京都の一流の呉服商雁金屋の三男として生まれ、幼い頃から書を含め様々な教養を積みます。書籍を好み、文人的な世界への憧れが強かった乾山は、父が亡くなる若くして隠棲生活を送るようになります。隠棲地の近くでは京焼の名手である野々村仁清が御室焼を営んでおり、乾山は仁清などからやきもの技術を学び、鳴滝・二条丁子屋・佐野と場所を移しながらも生涯にわたってやきもの制作を続けることとなります。乾山は様々な種類のやきものを制作していますが、その中でも特徴的なものが、絵師として著名な兄光琳(1658~1716)や専門の絵師たち、または乾山自らによって描かれた絵の傍らに乾山の書が添えられた作品群です。当時数多くの窯があった京焼の中でも、書を積極的にやきものに取り入れたのは乾山

が初めてであり、書を得意とする教養人であった乾山ならではの造形でした。

大和文華館蔵「鏤絵柳文重香合」(図1)もそうした作例の一つで、器体の上面には「花飛玉溝水 葉傍漢宮煙(花は玉溝の水に飛び 葉は漢宮の煙に傍う)」という詩が乾山によって書かれ、側面には五本の柳の木が描かれています。また裏面には「正徳年製」という年記銘があり、正徳年間(1711~16)に作られたことが分かります。側面に描かれた柳の葉はまだ芽吹いたばかりの様子で、ポツポツと点々のみで簡明に表現されています。こうした柳の葉の表現は乾山の絵画にも見られることから(図2)、この香合の絵付けも乾山本人による可能性がります。詩は明時代を代表する詩人である何景明が長安の柳を詠じたものの一部で、風に吹かれて柳の花(=綿状の種子)が舞い、葉がゆれる都の春の情景が表されています。簡略な筆致ながら味わいのある柳の絵に、乾山の温かみある書で春柳の詩が添えられることによって、画面の趣が一層深いものとなっています。やきもの絵付けに詩を附すことは、乾山以前にも中国において見ことはできます。例えば明末の天啓期(1621~27)を中心に景德鎮の民窯で焼かれ日本に輸出された古染付(図3)や、精巧な絵付けがされた清

時代初期の青花磁器には、しばしば詩が記されています。特に古染付においては日本の茶器向けに作られたものに詩文が書されることが多いことが指摘されており、茶人たちの間で詩を織り込んだやきものが好まれていたことは、乾山のやきもの方向性にも何らかの影響を与えたと思われる。ただ、古染付に見られる詩の書体は特徴のあるものではなく、単に絵に関連した詩句が記されているにすぎない感があります。それは清時代の青花においても同じです。それに対し乾山のやきもの詩は、乾山独特の書体でゆったりと記されており、絵に引けをとらない存在感、芸術性があります。詩のあとには「乾山省書」といった落款が記されることから、独自性のある書であることを意識し、詩・書・画の三位一体を目指していたことが窺えます。ちなみに「鏤絵柳文重香合」では「乾山尚古齋深省書」と長い落款が記されます。

文人画のような詩・書・画が美しいハーマニーを奏する境地をやきものにおいて作り上げるため、乾山はやきもの技法にも工夫をこらしています。乾山が工夫したやきもの技法としてよく知られるのが白化粧下地です。素地に白泥を化粧掛けすることで白い地を整え、絵や書を美しく映えさせることが可能となりました。「鏤絵柳文重香合」でも白化粧下地に鏤絵具で絵付けし、その上に透明釉を掛けています。鏤絵具も墨に似た深い色を出すため、鉄に呉須(コバルト)を混ぜるなどの工夫がされています。器の形に関しては、詩が書されるものの場合、画軸を思わせる平たい方形(例:図4)

のものが好まれています。「鏤絵柳文重香合」は三段重ねの身に蓋が被さった珍しい形をしています。立体物の上面に詩が書され、側面に絵が描かれることにより、絵と詩が互いを包み合うような、絵画の規格に倣った方形のものとはまた違った趣があります。

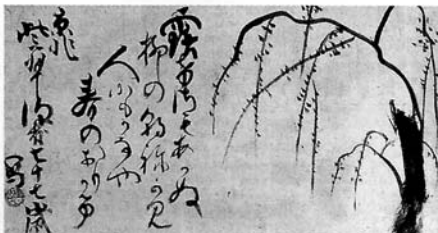
重香合は漆器の作例が多く、「鏤絵柳文重香合」は漆器を原型としているのではないかと思います。蓋の縁を面取りして段をつけるのも、漆器の造形と類似します。乾山・光琳兄弟の遠い親戚にあたる本阿弥光悦(1558~1637)は書や陶芸に優れていたほか、漆工芸の制作にも関わっていたことが知られ、光琳も絵画制作を主にしながら、光悦作品に倣った時絵硯箱なども制作しています。乾山作の漆工芸品は現在のところ残されていないものの、漆の作品を身近に学ぶ機会は多かったでしょう。乾山のやきものには「蓋物」と呼ばれる被せ蓋形式の器がありますが、これもやきものには珍しい形で、やはり漆の硯箱や文箱を原型にしているのではないかと考えられています。

一つ分野に限らず、絵画・書・漆工芸・陶芸といった互いの分野を行き来しながら新たな造形を生み出すのは、光悦・宗達・光琳・乾山ら所謂「琳派」の大きな特徴です。乾山も陶芸を中心にしながら、そこへ書や絵画、漆工芸などの魅力を取り込み、新しい乾山ならではの世界を作り上げており、「鏤絵柳文重香合」はそうした乾山の魅力がよく窺える作品となっています。

(学芸部部員 宮崎もも)

図1 尾形乾山作鏤絵柳文重香合
大和文華館蔵

図2 尾形乾山筆 柳図 大和文華館蔵

図3 青花富士山形平鉢
大和文華館蔵図4 尾形乾山作光琳筆
鏤絵菊図角皿
大和文華館蔵

季刊 美のたより No.159

平成19年6月29日

発行 大和文華館